

初期ギリシア文学における神々の相克

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-15 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00063853

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



初期ギリシア文学における神々の相克

Research Project

All

Project/Area Number

12610576

Research Category

Grant-in-Aid for Scientific Research (C)

Allocation Type

Single-year Grants

Section

一般

Research Field

文学一般(含文学論・比較文学)・西洋古典

Research Institution

Kanazawa University

Principal Investigator

安村 典子 金沢大, 工学部, 教授 (20293376)

Project Period (FY)

2000 - 2001

Project Status

Completed (Fiscal Year 2001)

Budget Amount *help

¥2,800,000 (Direct Cost: ¥2,800,000)

Fiscal Year 2001: ¥1,200,000 (Direct Cost: ¥1,200,000)

Fiscal Year 2000: ¥1,600,000 (Direct Cost: ¥1,600,000)

Keywords

アルクマーン / 宇宙論 / テティス / コルヌートス / ホメーロス / イーリアス / スコリア

Research Abstract

アルクマーンのいわゆる「宇宙論的詩」について考察した。これはオクシュリンコスで発見されたパピルスの断片に記されていたもので、紀元前7世紀の詩人アルクマーンの詩についての注解である。パピルスは紀元後2世紀のものと考えられており、注解者の名前は不詳である。

注解によるとアルクマーンは宇宙論を述べた詩を書いたとされ、その宇宙論では全世界の創造者として女神テティスの名前があげられているという。後のギリシア神話ではテティスはむしろ弱小神とされているため、この注解に関しては多くの議論が行われている。

本研究ではまず、注解書の歴史を考察することにより、テキストと注解書の関係について考察した。紀元後2世紀ころ、すなわち当該パピルスとほぼ同時代の注解書であるスコラ哲学者コ

ルヌートスの注解、『イーリアス』の「スコリア」等を調べた結果、その時代にはきわめて独特な文学理解があり、注解書はいずれもその方針にそって記されていることが判明した。それは『イーリアス』やその他の詩を、宇宙の自然現象として説明するというものである。したがってアルクマーンのいわゆる「宇宙論的詩」の注解も、このような「注釈の伝統」に則って書かれたものとみなされるべきことが論証された。

次に、アルクマーンの詩の特徴、彼が生きた紀元前7世紀のスパルタの状況などを考察し、「宇宙論的詩」の中で歌われているテティスの役割を調べ、この歌が実際には『イーリアス』1巻の、テティスの嘆願場面を扱ったものである可能性が高いことが考察された。

Report (1 results)

2000 Annual Research Report

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-12610576/>

Published: 2000-03-31 Modified: 2016-04-21